

ルーマニアにおける国家保安部^{セクリタテア}記録文書公開

——ヘルタ・ミュラーが見る「過去の克服」の現実——

藤田 恭子

1. はじめに

1989年12月にチャウシェスク(Nicolae Ceaușescu)体制が崩壊し、四半世紀余りが過ぎた。ルーマニアが民主化の道を歩むなか、ルーマニア出身のドイツ語話者たちは今、二つの「過去」との対峙を余儀なくされている。第二次世界大戦中のナチズム受容、そして戦後の社会主義独裁体制下での相互監視体制、とりわけ通称「セクリタテア(Securitatea)」として知られる国家保安部(Departamentul Securității Statului、本稿では以下、セクリタテア)の容認や協力をめぐる「過去」である。

ルーマニア出身のドイツ語作家、詩人、評論家、研究者たちは、この二つの「過去の克服」について激烈な議論を交わし、その葛藤と苦悩は現在も進行中だ¹⁾。とりわけ後者に関しては、2007年1月1日付でルーマニアがEUに加盟する直前の2006年12月29日、トラヤン・バセスク大統領(Traian Băsescu)により、セクリタテアの記録文書すべてをその後継組織から、同文書の管理と精査にあたる別組織へ引き渡す決定が下され、申請した当事者に対する文書の公開が決定したことで、旧東ドイツの国家保安省、通称「シュタージ」の記録文書をめぐる紛糾と同様の、場合によってはそれ以上の波紋をも呼ぶことになった。閲覧者が同文書中に「報告者」や「協力者」として長年の友人や知人あるいは職場の同僚等を見出すことで人間関係が崩壊するばかりでなく、過去の「密告」や「誣告」に対する糾弾が、個人名を挙げつつ各種メディアで

1) 二つの「過去」のうち、ナチズム受容の過去については、ルーマニアの体制転換後、客観的な視点の確保も可能となってきた。同郷人会系の組織として出発したミュンヘン大学附置南東ドイツ研究所主催のシンポジウムをまとめた著作も刊行されるようになっている。Vgl. Markel, Michael / Motzan, Peter: *Deutsche Literatur in Rumänien und das „Dritte Reich“ -Vereinnahmung-Verstrickung-Ausgrenzung-*, München (IKGS) 2003.

相次ぎ、他方では「糾弾」の不当性を訴える主張も多く取り上げられた²⁾。

本稿では、ルーマニア・ドイツ語文学における社会主義独裁体制の「過去」の「克服」を理解するために必要な基礎知識を整理する。また 2009 年度ノーベル文学賞受賞者であるルーマニア出身のドイツ語作家ヘルタ・ミュラー（Herta Müller）が文書閲覧後に執筆した著作を取り上げ、ミュラーが指摘しているセクリタテアの記録文書とその取り扱いに見られる問題性を整理する。

論述の手順として、最初に、セクリタテアの活動概要とその記録文書公開の経緯を提示する。そのうえで、ミュラーの著書を取り上げ、そこでの主張を確認する。全体を通して、第二次世界大戦後の社会主義独裁体制下で人民に対する抑圧組織として絶大な機能を発揮し続けたセクリタテアをめぐる「過去の克服」の動向と言説の特性を指摘する。

2. セクリタテア、および同記録文書開示をめぐる経緯

セクリタテアは、1948 年 8 月 28 日の国民議会最高幹部会令により設置され、同月 30 日に内務省に統合された。同令第 2 条によると、その使命は「国内外の敵の策謀よりルーマニア人民共和国を防御し、民主的に獲得したものを防衛すること」³⁾とされている。裏を返せばセクリタテアは体制への批判を封じ込めるための機関であり、体制の矛盾を体制側が隠蔽しようとするほど、組織は急速に膨張した。1949 年 2 月 11 日付の職員数は 3,549 名であったが⁴⁾、1951 年 1 月には 7,252 名から 15,280 名に増

2) 「糾弾」例も「反論」例も枚挙に暇がない。セクリタテアの記録文書を目にした当事者の作家や研究者によるシンポジウムも行われており、書籍として刊行されている。Csejka, Gerhard / Sienerth, Stefan (Hrsg.): *Vexierspiegel Securitate. Rumäniendeutsche Autoren im Visier des kommunistischen Geheimdienstes*, Regensburg (Friedrich Pustet) 2015.

3) Decretul nr. 221 din 28.08.1948 pentru înființarea și organizarea Direcției Generale a Securității Poporului. In: Consiliul Național pentru Studierea Arhivelor Securității: *Securitatea. Structuri–cadre: Obiective și metode, Vol. I (1948–1967)*, București (Editura Enciclopedică), 2006, p.10.本書は、本文で後述する「セクリタテア記録文書研究国民評議会」刊行の資料集である。邦訳にあたっては、以下に掲載されたドイツ語訳を参考にした。Dancea, Georgeta Daniela: *Mythen und Vergangenheit. Rumänien nach der Wende. Inaugural-Dissertation zur Erlangung des Doktorgrades der Philosophie an der Ludwig-Maximilians-Universität, München*, 2005, S. 57.

4) Banu, Florian: „Un deceniu de împliniri mărețe”. *Evoluția instituțională a Securității în perioada 1948-1958*, cuvânt înainte de Gheorghe Buzatu, Iași (Editura Tipo Moldova), 2010, p. XIX. Zititert nach: Pleșa, Liviu: *Cadrele Securității în timpul lui Teohari Georgescu*, in: *Caietele CNSAS Revistă semestrială editată de Consiliul Național pentru Studierea Arhivelor Securității Anul IV, nr. 1-2 (7-8)*, 2011, p. 22.

員され、当初空席だった7,427名分も約2年で埋められたという⁵⁾。ただしセクリタテアの体制とその変遷を明らかにしようとする研究においても、職員数さえ諸説あり、いまだに実態は完全に解明されているわけではない。ダンチャは、先行研究で示されたデータを引用しチャウシェスク体制末期の職員数に言及しているが、38,682名とする数字に加え、1989年12月22日すなわち体制崩壊直前の職員数について14,259名とする文献の存在をも提示している⁶⁾。それにもまして解明が進んでいないのは、セクリタテアの情報提供者すなわち「非公式協力者」や、彼らの活動による被害者についてである。両者の人数についても、大幅に異なる複数の数字が推定されている。情報提供者についてダンチャは、約40万人説、約70万人説、約80万人説を挙げている⁷⁾。ヴァーデリーも「1989年の数は、人口2300万人に対し、48万6千人から100万人にまで及んでいる」⁸⁾と報告している。また被害者の数は確認されていない。ダンチャは1948年から1964年の刑務所および労働収容所収容者について「相当数の研究者によれば約200万人」⁹⁾とのみ記しているが、刑務所や労働収容所への移送に至らないものの、監視の対象となった者は含まれておらず、1965年以降の数字についても記載されていない。

ダンチャはセクリタテアの歴史を概説する際、組織の変遷を二段階で捉えている¹⁰⁾。

5) Banu, „Un deceniu de împliniri mărețe”, p. XX. Zitiert nach: Pleșa, *Cadrele Securității în timpul lui Teohari Georgescu*, p. 26-27.

6) Dancea, *Mythen und Vergangenheit*, S.67. それぞれの職員数の出典として、以下が挙げられている。Catalan, Gabriel / Stănescu, Mircea: *Scurtă istorie a Securității*. In: *Sfera Politicii*, Nr. 109, 2004, S. 42. Deletant, Dennis: *Ceaușescu și Securitatea*, Bukarest (Editura Humanitas), 1998, S.359.

7) Dancea, Ebenda. 文中の三通りの数字について、以下が出典として挙げられている。「約40万人」説は、Deletant, *Ceaușescu și Securitatea*, S. 351. クリスマス革命でチャウシェスク体制から変わったイリエスク体制下で国家保安部長となったメグレアス(Virgil Măgureanu)が提示した数字だという。「約70万人」は Brucan, Silviu: *Generația irosită. Memorii*, Bukarest (Editurile Univers & Calistrat Hogaș), 1992, S.198. また「約80万人」という数字は、『22』誌に掲載された、チャウシェスクの元側近パチェパ(Ion Mihai Pacepa)のインタビュー内容を基にダンチャが推定した。パチェパは、一人の職員が少なくとも50人の情報提供者と50人の協力者を持たねばならなかった旨を証言しており、幹部職員数およそ8,000人から推計したという。Vgl. 22, Nr. 6, 1999, S. 12. なおパチェパにはチャウシェスク体制の内幕を暴露した著書があり、邦訳されている。パチェパ、イオン・ミハイ『赤い王朝 チャウシェスク独裁政権の内幕』住谷春也訳、恒文社、1993年。

8) Verdery, Katherin: *Secrets and Truths. Knowledge Practices of the Romanian Secret Police*. Oskar-Halecki-Vorlesung 2010, Leipzig (Leipziger Universitätsverlag) 2012, S. 58.

9) Dancea, *Mythen und Vergangenheit*, S. 60.

10) 以下、Dancea, *Mythen und Vergangenheit*, S. 61-62 を参照。

第一期は1948年から1964年で、第二期は1965年から1989年とされる。第一期のセクリタテアはソ連の国家保安委員会（KGB）の強い影響下にあり、極端に物理的な残忍さが特徴で、極めて残酷な拷問や処刑が横行した、という。職員には、貧しいプロレタリアート出身者が多く、傭兵の存在で、教育を受けず読み書きできない者もいた。1949年の統計によると、職員の64%は労働者出身で、公務員出身は28%、知識人4%、職業革命家2%であったという¹¹⁾。1964年に、スターリンの死後もブカレストに留まっていたKGBのアドバイザーが引き揚げた。その後が第二期で、1965年は、チャウシェスクがゲオルギウ＝デジ（Gheorghe Gheorghiu-Dej）の死去に伴い、党第一書記（書記長）に選出された年である。1968年には「ブラハの春」をめぐる、ルーマニアとソ連の関係悪化が顕在化した。ダンチャによればチャウシェスク体制下の第二期においては、第一期の蛮行により人民の間にセクリタテアに対する恐怖心が浸透しており、セクリタテアは暴力的措置を示唆するだけで際限ない恐怖と不安を掻き立てることが可能になったという。反体制と見なされた者に対する肉体的攻撃が消えたわけではないが、セクリタテアはより巧みな心理的作戦を弄することで、人民を統制していった。職員は「教育を受けた」「似非知識人」であったとの言及がある¹²⁾。

こうしてセクリタテアは、人民を恐怖と不安により統制することでチャウシェスク体制をも支え続けたが、1989年の革命を経て解体され、1990年3月に、後継組織として、ルーマニア情報部（Serviciul Român de Informații、本稿では以下、SRI）が設立された。革命後には、様々な立場の人々、例えば諸政党や人権団体、歴史家や知識人等から、ドイツのガウク機関（Die Gauck-Behörde）¹³⁾のような、セクリタテアの犯罪を解明する機関の設立が求められ、野党議員から議会に法案の提出もなされた。しかしイリエスク（Ion Iliescu）政権下で、それらが正面から取り上げられることはなかった¹⁴⁾。イリエスク自身もその政権の担い手の多くも、チャウシェスク体制と深く関わる立場にあったことも関係すると思われる。1996年に政権が交代したことで、事態は前進した。

1999年12月7日、「法令第187号 本人データファイルへのアクセスと共産党政治

11) ダンチャの出典は、Catalan / Stănescu, *Scurtă istorie a Securității*, S. 42.

12) Oprea, Marius: *Banalitatea răului. O istorie a Securității în documente. 1948-1989*, Iași (Editura Polirom), 2002, S. 137. Vgl. Dancea, a.a.O., S. 62.

13) 正式名称は、「旧ドイツ民主共和国国家保安省保管文書担当連邦特任機関（Die Behörde der Bundesbeauftragten für die Unterlagen des Staatssicherheitsdienstes der ehemaligen Deutschen Demokratischen Republik）」。

14) Dancea, *Mythen und Vergangenheit*, S. 168-169.

警察の非行暴露について（LEGE Nr. 187 din 7 decembrie 1999 / privind accesul la propriul dosar și deconspirarea poliției politice comuniste）¹⁵⁾」が成立し、同月9日より施行された。同法令では、セクリタテア記録文書の扱いについて、主に三つの方針が明文化された。第一に、ルーマニア国民や、ルーマニアのEU統合後はEU市民に対して、自身に関わる記録文書閲覧の権利を保障すること。第二に、公職のための候補者については、旧セクリタテアとの関わりがなかったかを迅速に検証すること、第三に、1948年以降のルーマニアにおける共産党政権の罪の解明を行う研究センターを設立すること、である。これらの方針を施行するための組織が、同法第7条に基づいて設置された。「セクリタテア記録文書研究国民評議会（Consiliul Național pentru Studiarea Arhivelor Securității, 略称CNSAS, 本稿でも以下、略称を使用）」である。第8条によれば、CNSASは議会により指名された11名の評議員からなる独立した機関である。評議員は議会両院に所属する各会派の推薦に基づき指名され、当然のことながら、以前にルーマニアおよび他国の保安関係の組織に関わりがない人物であることが求められたが、問題は多かった。例えば、推薦の母体となる議会の各会派議員も、チェウシェスク体制の下でセクリタテアと無関係の者ばかりとはいえない。セクリタテアの監視網は社会の隅々にまで張り巡らされていたからである。この状況でCNSASが使命を果たすべく活動を活発化すれば、議員や司法・行政・教育等に携わる公務員、宗教界の指導者等にもセクリタテアへの関与の暴露が及ぶ可能性は高かった。

2008年1月、ルーマニア憲法裁判所は、CNSASによる文書検証の結果が法的拘束力を持つことに関して、1999年の法令第187号はルーマニア憲法を逸脱しているとの結論を下した¹⁶⁾。同判決は同年2月6日付官報第95号で布告されると同時に、この判決を受けて同年3月8日、CNSASに関する緊急政令が布告され¹⁷⁾、以後、CNSASによる文書検証の結果を法的措置に直結させることも裁判における法的証拠として使用することも出来なくなった。実際には、政治家や裁判官、高級官僚その他、公職にある者について、セクリタテアへの協力の有無について実名を挙げたうえでの検証結果公表が難しくなった。「過去の克服」は明らかに後退を余儀なくされたのである。

15) http://www.cnsas.ro/documente/cadru_legal/LEGE%20187_1999.pdf（2016年4月8日閲覧）

16) 2008年1月31日付、憲法裁判所判決。<http://www.monitoruljuridic.ro/act/decizie-nr-51-din-31-ianuarie-2008-referitoare-la-exceptia-de-neconstitutionalitate-a-dispozitiilor-legii-nr-187-1999-privind-accesul-la-propiul-dosar-si-deconspirarea-politiei-politice-comuniste-89361.html>（2016年4月8日閲覧）

17) http://www.clr.ro/rep_htm/OUG24_2008.htm（2016年4月8日閲覧）

3. ヘルタ・ミュラーが指摘する CNSAS の問題点

ミュラーは CNSAS に対し自らのセクリタテア記録文書の開示を請求し、実際に文書を閲覧すると、2009 年、見解を著作『クリスタと彼女のまがい物、あるいは、何がセクリタテアの記録に載っている（いない）か¹⁸⁾』（以下、『クリスタと彼女のまがい物』）として発表した。本書でミュラーは記録文書から見えるセクリタテアの監視の恐怖を改めて確認し、その当時の記憶を振り返ると同時に、CNSAS が記録を当事者に開示し疑惑を解明するという使命に反し、むしろ疑惑を隠蔽し、セクリタテア職員や非公式協力者の保身を優先している、との主張を行った。

以下、ミュラーの主張の詳細に触れるが、その前に、ミュラーとセクリタテアについて簡略に述べておこう。

1953 年生まれのミュラーは、1973 年から 1976 年にかけてティミショアラ大学でドイツ文学およびルーマニア文学を専攻した後、トラクター工場（TEHNOMETAL）に翻訳者として勤務した。だがセクリタテアの協力者となるよう強要された際に拒否したことで報復され、工場を解雇された¹⁹⁾。しかしミュラーに対するセクリタテアの監視はそれ以前から始まっていたと思われる。大学在学中からミュラーは、ティミショアラ大学でドイツ文学を専攻していた学生たちにより結成され、当局に反体制的と見なされた文学集団「アクショングループ・バナート（Aktionsgruppe Banat）」²⁰⁾と非常に近い関係にあった²¹⁾。ミュラーはグループの正式メンバーではなかったが密接な交

18) Müller, Herta: *Cristina und ihre Attrappe, oder, Was (nicht) in den Akten der Securitate steht*, Göttingen (Wallstein) 2009.

19) Vgl. Notizen. In: Arnold, Heinz Ludwig (Hrsg.): *Text + Kritik. Zeitschrift für Literatur* VII/02 (155. Herta Müller), München (edition Text + Kritik) 2002, S. 104.

20) リーダー格のリヒャルト・ヴァーグナー（Richard Wagner）をはじめ、戦後生まれのメンバーは、1965 年にチャウシェスクが党第一書記となった後、表面的かつ短期間ではあったが自由化の空気を経験し、体制に対し建設的批判を行う可能性があると感じていた。だが結成 3 周年の公開朗読会を機に全員が逮捕され、解散を余儀なくされた。Vgl. Wagner, Richard: *Die Aktionsgruppe Banat. Versuch einer Selbstdarstellung*. In: Solms, Wilhelm (Hrsg.): *Nachruf auf die rumäniendeutsche Literatur*, Marburg (Hitzeroth) 1990, S. 121-126.

21) 2009 年のノーベル賞授賞式当日の晩餐会のスピーチでミュラーは同グループに言及し、次のように語っている。「彼らがいなければ、私は本を読むことも書くこともなかったでしょう。さらに重要なのですが、これらの友人は私が生きるために不可欠な存在でした。友人たちがいなければ、私は抑圧に耐えかねたことでしょう。」Müller, Herta: *Tischrede*. In: *Dieselbe: Immer derselbe Schnee und immer derselbe Onkel*, München (Carl Hanser) 2013, S. 23.

流があり²²⁾、セクリタテアの監視の対象ともなった可能性が高い。ミュラーはドイツに出国した後、三年を経てもなお、匿名の電話や手紙による殺害の脅迫を受けながら生活していると書き記しており²³⁾、他の作品でも、生活のありとあらゆる場面でルーマニアでの抑圧と恐怖の記憶が脳裏から消えない様を描いている²⁴⁾。

セクリタテアの記録文書を閲覧したミュラーの第一の見解は、この組織が過去の遺物ではなく、チャウシェスク体制崩壊後も厳然として力を振るい、ミュラーも含めた人々を抑圧し続けている、ということである。彼女は自著『クリスタと彼女のまがい物』において、記録文書そのものの信憑性、そして CNSAS による開示の恣意性について繰り返し疑念を呈している。その根底には、セクリタテアから後継組織の SRI、さらに CNSAS へと記録資料が引き継がれるなか、両組織にはなお多くの旧セクリタテア職員が残されており、旧セクリタテアの影響力は厳然として存在するとの認識があったからである。

ミュラーは、上記のような疑念を踏まえて、自ら経験した文書公開の在り方の不自然さを二点挙げている。第一は、ミュラーが長期間にわたり繰り返し文書閲覧申請を出しており、その度にファイルが見つからない旨の回答を得ていたにもかかわらず、突然、ファイルが見つかったとされたことである。

突然、クリスティーナという名で私の記録ファイルが見つかった。三巻で、914 頁。1983 年 3 月 8 日作成というが、記録には、それ以前の年の文書も含まれていた。記録ファイル開設の理由は、私の著書『どん底 (Niederungen)』における「国内、特に農村環境における現実の偏向的歪曲描写」だ。スパイによる「テキスト諸分析」がそれを裏付けている。そして私は「敵意のある著作で知られている、ドイツ語作家サークル」に属している。²⁵⁾

22) ヴィヒナーが編集した同グループのアンソロジーに、ミュラーのテキストは収められていない。Vgl. Wichner, Ernest (Hrsg.): *Ein Pronomen ist verhaftet worden: die frühen Jahre in Rumänien ; Texte der Aktionsgruppe Banat*, Frankfurt a.M. (Suhrkamp) 1992. ミュラーは、グループのリーダー的存在であったヴァーグナーと結婚し、1987 年には夫婦として共にドイツに出国したが、後に離別した。

23) Vgl. Müller, Herta: Wenn etwas in der Luft liegt, ist es meist nichts Gutes. In: Dieselbe: *Der König verneigt sich und tötet*, München (Carl Hanser) 2003. S. 190.

24) 例えば、Müller, Herta: Das Land am Nebentisch. In: Dieselbe: *Eine warme Kartoffel ist ein warmes Bett*, Hamburg (Europäische Verlagsanstalt) 1992, S. 9-11.

25) Müller, Cristina und ihre Attrappe, S. 14-15.

ファイルの新規作成の日付は 1983 年とされるが、1982 年にルーマニアで刊行されたミュラーの処女小説「どん底」に関する分析が添付されており、またアクショングループ・バナートとの関係についても示唆されていることから、閲覧を許可されたファイルには、それ以前の時点での記録が収められた部分が添えられていたか、ミュラーに関する別ファイルが存在していた可能性も考えられる。

その点をも踏まえてミュラーは、閲覧に供されたファイルに収められた文書の内容についても疑義を示し、文書管理の過程で、文書の捏造や削除および破棄が行われている可能性を指摘した。

記録ファイルは、名前だけ SRI になったベテランの保安部職員の駄作だ。この職員は 10 年にわたり、この記録に「従事する」ためなら、いつでも時間があつた。この記録を「粉飾」と呼ぶことはできない、記録から肝心な部分が徹底的に取り除かれているからだ。核心部分は抹消されている、セクリタテアの専任職員が面倒に巻き込まれるだろうことはすべてだ。

このような浄化改竄 (Säuberung) は特殊なケースではない。CNSAS 設立時の理事会メンバーだったアンドレイ・プレシュは憤りと抗議から、この委員会をとうの昔に離れた。彼は自分の記録ファイルを以前に文書保管庫内で見ており、約 2000 頁に及ぶ厚さであることを知っていた。ところがその記録ファイルがようやく彼に手渡されたとき、わずか 70 頁からなっていたのだった。²⁶⁾

また返す刀でミュラーは、CNSAS の記録文書検証に対する姿勢にも疑念を呈し、その及び腰を厳しく批判している。

法律によれば CNSAS は、記録閲覧に加え、スパイの実名を調査のうえ明らかにするよう義務づけられていた。しかし聞くところでは、これまで自分の記録ファイルを閲覧したすべての人が同じことを言っている。スパイの長いリストのうち、当局は一人だけを選び出し、その実名を伝えてきた、というのだ。しかもこのたった一人は、記録ファイルの中では取るに足らない人物か、すでに死亡している人物かだ。お役所は、大物スパイたちや繰り返されたひどい裏切りを追跡するつもりはないようだ。ボイコットなのだろうか。お役所が仕事をすると、自分

26) Müller, *Cristina und ihre Attrappe*, S. 15.

自身が不利になるのだろうか。だが誰の指図なのだろうか。²⁷⁾

ミュラーが念頭に置いているのが、2008年の憲法裁判所の判決後の状況なのか、それ以前をも含めてなのかは、この文章だけでは不明である。しかし、CNSASが設立当初より、委託された検証作業の重みに対し必ずしも十全の体制で臨めていなかったであろうことは想像しうる。2008年の憲法裁判所の判断は、CNSASの活動範囲と権限をさらに縛ることになり、セクリタテアによる被害の補償を一般市民である被害者が実現させることは一層困難になったと思われる。

CNSASによる文書公開に際して、セクリタテアの犯罪性を隠蔽し無害化するように、文書の削除が行われている、という主張を裏付けるため、ミュラーは自らがセクリタテア職員からいかなる抑圧を、しかも自らや周囲の人間の生命にさえ関わるような形で圧迫が行われていたのかを回想しながら、その詳細を次々と語っていく。実のところ、彼女が指摘している「セクリタテアの記録に何が載っていないのか」の列挙が、この著作でもっとも多く紙幅を占めているともいえるほどである²⁸⁾。長くなるが、主なトピックを挙げてみよう。

- ・ミュラーは大学卒業後にドイツ語／ルーマニア語翻訳者として勤務したトラクター工場で、セクリタテア職員から二度、会社をスパイするよう求められ、二度とも拒絶すると、彼女がセクリタテアのスパイであるとの誹謗中傷が工場中に蔓延し、辞職申し出を強いられることになった。
- ・退職を余儀なくされたミュラーをセクリタテア担当者が「寄生分子（*separatâres Element*）」と呼び、牢獄への収監、あるいは建設現場での強制労働を示唆し脅した。
- ・親友が家庭教師等の仕事を仲介してくれるが、数回授業を行うと、セクリタテアの妨害が入り、断られる事態を繰り返した。ミュラーは、闇商売や売春、さらには西ドイツの連邦情報局（BND）のスパイをしているのではないかと、いった理由をつけて何度も出頭命令を受け聴取される他に、突然、白昼の路上から連行されることもあった。
- ・『どん底』が西ベルリンのRotbuch Verlagから刊行される際には、目立たないよう編集者と、(国際的なウィンタースポーツリゾートである)ポイアナ・ブラショフで会う約束をした。夫のヴァーグナーが原稿を持って一足先にブカレストに向か

27) Müller, *Cristina und ihre Attrappe*, S. 15.

28) Müller, *Cristina und ihre Attrappe*, S. 15-29.

い、ミュラーは翌日、原稿を持たずに夜行列車でブカレストに向かおうとして、二人のセクリタテア職員に脅された。

- ・『ツァイト (Die Zeit)』紙のジャーナリスト、ロルフ・ミヒャエリス (Rolf Michaelis) がブカレストにミュラーを訪ねてきた際、訪問を知らせる電報がセクリタテアに横取りされ、ミュラー夫妻は何も知らず泊りがけで出かけた。ミヒャエリスは無駄足を踏んだ上、二日目にアパートのダストシュート室で三人の男に待ち伏せされて殴られ、両足指を骨折して、建物の五階から道路まで階段四つを這って降りなければならなかった。
- ・最も親しい友人の一人ローラント・キルシュ (Roland Kirsch) がすぐ近所に住んでおり、ミュラー夫妻の自宅を毎日のように訪ねてきていた。ミュラーらの出国後、1989年5月にキルシュが自宅で首を吊っているのが発見された。直前に住居で殴り合いがあり複数の大声が聞こえた、現在では隣人たちが述べている。

ミュラーは自ら経験した上記の出来事について、自らの記録文書にいっさい記載がないと繰り返し強調する。特にキルシュについては、毎日のように訪問してくれていたにも関わらず、そのことに一切触れておらず、名前も完全に削除されており、「この人物は、まったく存在していなかったことにしよう」²⁹⁾との意思さえ見えることを指摘している。

他方でミュラーは、記録文書から心の慰めを得たことについても触れている。トラクター工場からの辞職を強要されたミュラーに救いの手を差し伸べ個人教授の職を繰り返し斡旋してくれた親友が、ドイツへ出国したミュラーを、出国の翌年に訪ねてくる。親友は癌に冒されており、ミュラーとの再会を望む中で、一時的出国の許可を得る代償にセクリタテアの指示を受け、ミュラーの住居でミュラーの身辺情報を収集していた。ミュラーはこの親友と決別したが、友情の記憶と友の裏切りの記憶とを反芻しながら、友情の記憶のどの時点からセクリタテアが介在していたのか、について苦悩していた。記録文書において、親友が自分を裏切る行動に出たのは、自分の出国後であることを知って、愛憎半ばしていた気持ちを整理することになったという³⁰⁾。親友に関わる部分に関してミュラーは、記録文書の信憑性に敢えて異を唱えることはせず、記録の文面そのものを受け容れる姿勢を示しているが、それはおそらく、人間心理の見地からも理解しうる行動であろう。しかし、この部分を除いて、ミュラーは自らの

29) Müller, *Cristina und ihre Attrappe*, S. 29.

30) Müller, *Cristina und ihre Attrappe*, S. 30-31.

記録文書に、文書削除以上のセクリタテアの力を見出していく。

記録文書のなかに見出した、セクリタテアのゆがんだ権力のもっとも顕著な表出としてミュラーが強調しているのは、彼女について、ルーマニアのエージェント、セクリタテアのスパイとして活動する人物というイメージと情報を捏造し、それを広めようとしたセクリタテアの活動である。著書の表題『クリスタと彼女のまがい物』は、この認識に基づいている。

ミュラーによれば、1984年、『どん底』が検閲を経ないオリジナルな姿で西ドイツで刊行された後、セクリタテアの戦略が変更され、ミュラーは西ドイツでの文学賞授賞式のため、一時的な出国を許される。また突然、この年の初秋に、教員の職を提供された。「私は、これまでのように学校の教員仲間での体制批判者としてではなく、政権の益になる者として扱われ、西側でエージェントとして疑われるようにしようとした。」³¹⁾その後実際に、ミュラーと接触のあった複数の人物が、ミュラーが西側のエージェントではないかとの疑いを漏らしたとの記録があるという³²⁾。そしてミュラーによれば、このようなセクリタテアの工作を西側で支援した存在があり、それは彼女の出身地バナートのドイツ系住民がドイツで結成している同郷人会、すなわち「バナート・シュヴァーベン人同郷人会（*Landmannschaft der Banater Schwaben*）」であるという³³⁾。ミュラーがドイツで刊行した著書『どん底』には、バナートのドイツ系住民の村を舞台にした複数の短編および中編小説が収められているが、村の日々がいかにかに抑圧に充ちたものであるかを描いているこれらの作品は、実際の土地を失う中、頭のなかで描いた故郷にアイデンティティを見出そうとする同郷人会にとって大きな反発を覚えるものであった³⁴⁾。またミュラーは自らの父親が第二次世界大戦中に多くのルーマニア・ドイツ人と同様、ナチズムに同調し、ルーマニア軍ではなくナチの武装親衛隊に所属していたことを明らかにしている³⁵⁾が、同郷人会が、ナチズムに同調した歴史にも、またチャウシェスク体制そのものにも批判的姿勢を明らかにしないことを取り

31) Müller, *Cristina und ihre Attrappe*, S. 32.

32) Müller, *Cristina und ihre Attrappe*, S. 32-33.

33) Müller, *Cristina und ihre Attrappe*, S. 33.

34) Vgl. z.B. Todorică, Christina: *Rumäniendeutsche Literatur (1970-1990). Die letzte Epoche einer Minderheitenliteratur*, Tübingen / Basel (Franke) 1997, S. 90.

35) ノーベル賞受賞の際の、スウェーデン・アカデミーにおけるスピーチでも、「私の祖父母の息子は」という主語を用い、父のナチズム受容と親衛隊員であった過去についてかなり詳細に語っている。Herta Müller, *Jedes Wort weiß etwas vom Teufelskreis*. In: Dieselbe, *Immer derselbe Schnee und immer derselbe Onkel*, S. 16-17.

上げ、二つの「過去」に対する同郷人会の姿勢を痛烈に批判した。そのうえで、自らの文書に書き込まれたセクリタテア職員の手跡によるメモに基づき、ある人物の実名を挙げ、その人物はSORINという暗号名を持つスパイであることを明言し、この人物が1992年から1998年までバナート同郷人会の文化部担当者であったことを付言している³⁶⁾。同時にミュラーは、「バナートの国民社会主義民族集団の指導の人物たちが、同郷人会の創設メンバーに入っている³⁷⁾」とも指摘し、ナチズムの「過去」とも、またセクリタテアの「過去」とも正面から向き合うことができない同郷人会の体質を非難するとともに、そのような姿勢が、両者、とくにセクリタテアの影響力を温存させることにつながっていることを明言している。

著書の表題『クリスタと彼女のまがい物』についてミュラーは、著書の最後に「まがい物とその独り歩き (Die Atrappe und ihre eigene Wege)」と題した文章を掲載し、次のように解題している。ミュラーは自らの記録文書中に二人の相異なる人物が存在している、と述べている。

一人の名はクリスティーナ、国賊で駆除の対象だ。このクリスティーナの評判を落とすために、「D」(デマ [Desinformation]) 局の偽造部でまがい物のクリスティーナがでっち上げられた。体制に忠実な共産主義者で、厚顔無恥なエージェントで、党員といった、最も私を損なうような味付けを全部して。党員など、同郷人会の多くの幹部とは違って、一度もなったことがないのに。

どこに行こうと、至るところで、私はこのまがい物と一緒に生きていかなければならなかった。まがい物は私の後から送り込まれてくるだけではない、急ぎ足で私に先んずることもあった。私は最初から常に、反独裁でものを書いているにもかかわらず、まがい物は今日まで独り歩きしている。自立してしまったのだ。独裁は二十年もまえに終わっているのに、このまがい物は鬼火のようにあちらこちらを揺れ動いているのだ。あとどのくらい、続くのだろう。³⁸⁾

ミュラーは、今もお自分に付きまとい続ける、セクリタテアの工作物である自分のイメージを「まがい物」と呼び、それが命脈を保ち続けることに、セクリタテアの抑圧の影が消え去ろうとしないことを強く感じている。同時に、セクリタテアの力は、

36) Müller, *Cristina und ihre Atrappe*, S. 36.

37) Müller, ebenda.

38) Müller, *Cristina und ihre Atrappe*, S. 47.

ルーマニア社会さらにはドイツ人同郷人会が社会主義独裁体制下の負の「過去」と正面から向き合いきれない限り、温存され続けるであろうことをも示唆している。

4. おわりに

セクリタテアがなお温存している力に対するミュラーの恐怖と憂いは、旧東ドイツのシュタージ文書がもたらした衝撃ともまた質を異にするものである。東ドイツ政府から反体制的存在として抑圧され続けた詩人ライナー・クンツェ（Rainer Kunze）は、自らに関わる 3491 頁ものシュタージ文書を閲覧した後、それらを著書『暗号名《抒情詩》』³⁹⁾としてまとめた。文書の閲覧によりクンツェは、家族ぐるみの友人であり、体制転換後の東ドイツ社会民主党党首であるイブラヒム・ペーメ（Ibrahim Böhme）が自らの密告者であったことを知る。しかしこのような苦悩に満ちた事実であっても、クンツェは少なくとも、何が事実としてあったのか、何が真実であったのか、という点について判断材料を多く与えられていた。クンツェの書の裏表紙には出版社により次のような文が掲げられていた。「そして、我々にこの現実と向き合う心の準備があるかどうかは、我々、罪の所在を示された者に委ねられている。」

それに対して、ルーマニアの「負」の「過去」と向き合おうとするミュラーの言葉は、いまなお続く恐怖の感情のもと、行き着く先の見えない不安定さのなかにある。セクリタテアの人員や影響力が社会からなお排除されることなく機能し続けていると考えざるを得ない状況があり、それにもかかわらず、ドイツにおけるシュタージの「過去」との対決を範として念頭に置くと、そこには前提条件の乖離と方向性の矛盾を認めざるを得ない。

ルーマニア・ドイツ語文学にみるルーマニアの「過去の克服」は、現実と理想との大きな矛盾を抱えつつ、走り出している。

39) Reiner Kunze (Hrsg.): *Deckname »Lyrik«. Eine Dokumentation von Reiner Kunze*, Frankfurt a.M. (Fischer TB) 1990.邦訳もある。ライナー・クンツェ『暗号名「抒情詩」——東ドイツ国家保安機関秘密工作ファイル——』山下公子訳、草思社、1992年。